

---

## 米山のいわれ



むかし、むかし、米山は五輪山と呼ばれていました。

越前国から来た「泰澄」（たいちょう）と言う偉いお坊さんと修業僧の「沙弥」（しゃみ）が五輪山で修行をしていました。

沙弥はときどき、ふもとの村などで托鉢（修行のため経を唱えながら各戸の前に立ち食物などを鉢に受けて回る）するだけでなく、近くの岬から鉄鉢を飛ばして、海上を通る船からもお米をもらいながら、修行に励んでいました。

ある日、出羽国（現在の山形県、秋田県）の船主の上部清定（かんべきよさだ）が米を積んで沖を通ったとき、沙弥はいつものように鉄鉢を飛ばし、大きな声で「米をくだされ」と頼みました。

しかし清定は「米はお公へ差し上げるもので、一粒も渡せない」と断りました。

すると不思議なことに船に積んであった重たい米俵が浮かび上がり、五輪山に向かって空を飛んでいきました。それで、船の中には一粒の米もなくなってしまいました。

船から飛んでいった米俵は次から次へと米山の頂上に積み重ねられ、五輪山はお米の山となりました。

地元の人々は、「五輪山が米の山になった」「米の山、米山だ」と口々に叫び驚きました。



これを見ていた船主の清定は、とても恐ろしくなり、船を降りて五輪山のふもとの村人に「どうしたらよいか？」とたずねると、「泰澄というえらいお坊さんに頼んだらいい。」と教えてもらいました。

そこで清定は五輪山に登り、山頂にいた泰澄に「わずかな米をおしんだ私が悪かったです。」とわびながら、お米を返してくれるように頼みました。すると、

泰澄は「それは沙弥のしわざであろうから、ふもとの沙弥に頼むがよからう。」と言いました。

清定は山を下りて沙弥の所に行き「この米がなければ死罪になります。どうぞ許して下さい」とわびました。

沙弥は「お前がわずかな供養をおしんだので、こらしめたのだ。それが分ったのなら、早く船に帰れ。米は返してやる。」と言いました。

すると不思議なことに、山の頂上に積まれた米俵はまた鳥のように船に向かって飛んで行きました。

清定が船に戻ると、全ての米俵は元どおりに戻っていたので、「ありがたや、ありがたや」と涙を流して喜びながら、自分のしたことを後悔しました。

それ以来、人々は、五輪山を「米山」、沙弥が居て托鉢をしていたふもとの村を鉢崎（はっさき）、鉄鉢を船に飛ばしていた岬を聖ヶ鼻（ひじりがはな）と呼ぶようになりました。